

「諏訪之瀬島小・中学校の八月踊り伝承活動の取組」

1 学校名

十島村立諏訪之瀬島小・中学校

2 学年・人数

児童生徒16名

小学部 1年 1名 2年 1名 3年 2名 4年 2名

5年 2名 6年 1名

中学部 1年 2名 2年 3名 3年 2名

3 日時・場所

(1) 練習の日時・場所

令和4年7月1日 体育館

(2) 発表の日時・場所

体育館で講師を招き練習のみを行った。

毎年新節の踊りとして島内の公民館で4回、平成30年度にはジェイドガーデンで発表していたが、昨年度に続き、今年度も新型コロナウイルスの感染防止の為に中止となった。

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能について

(1) 名称 八月踊り（はちがつおどり）

(2) 由来

この諏訪之瀬島では奄美大北部の笠利町の伝統的な文化や生活習慣を受け継いでいる。その中で八月踊りは、奄美大島全域で伝染病が広がり、それに加えて天災や地震が起こり、その被害は目も当てられない程であったため、沖縄の王に相談したところ祭りにより祟りを解くということから八月踊りが始まったとされている。8月節句は、考祖祭といって、新穀を神前に供え、先祖を祭り、五穀豊穰を祈るのである。考祖祭は、新節（あらせつ）とシバサシとドンガに分け、これを三八月（みはちがつ）という。新節は親節で8月最初の丙（ひのえ）の日に行う。新米で作った「キミ」と「カシキ」を備えて火の神を祭り、豊年を祝う。丙の前日すなわち乙（きりと）の晩から部落隅々まで一軒も残すところなく夜を徹し2日3日踊り歩く。これをヤサガシという。現在では継承されていない。シバサシは新節から中7日おいて乙にツカリ丙に祭る。畑や屋敷の隅に柴（すすき）を立てて悪神を払う。

(3) 構成

自治会の行事の1つで公民館に集まり、囃子の方（男女3人くらい）、太鼓（女性のみ）踊り手（その他全員）が1つの円を作り、囃子の方の歌に合わせて太鼓がなり、踊り始める。囃子の方の男女がそれぞれ掛け合いし負けなように競い合う。その基礎医師に乗じてテンポがアップすると踊りもテンポアップして踊り方のリズムに合わせた踊りが要求される。この囃子の勝負

が決したら踊りが終わる。この勝負を2～3回する。つまり、踊りを2～3つくらい踊ると休憩をしてまた踊りはじめる。これを1時間30分くらい行う。

5 保存会や地域との連携の具体

特に保存会はなく、個人でビデオを撮り覚えていたりしている。地域の方は、子どもたちにも伝承してほしいという思いを持ち、子どもたちの練習に協力的である。基本的には、八月踊りの場で見よう見まねで踊りを覚えている。ただ囃子についてはしっかり伝承する必要性を感じる。本年度は、郷土教育の観点から、総合的な学習の時間や道徳の時間に地域の方をゲストティーチャーに活用したり、児童生徒自ら出向いてインタビューしたりするなど、由来や意義を学んだ。また、学校や島民合同体育大会、村民文化祭での演舞も新型コロナ感染拡大防止に気をつけながら実施した。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

全国的な新型コロナウイルス感染症拡大の影響で村の行事も縮小や中止が続いた。

その中でも伝統の灯を絶やさぬように、学校では毎年総合的な学習の時間において、島民の指導のもと児童生徒が八月踊りの練習に取り組んでいる。祈願祭では島民の参加者は神社で八月踊りを実施した。

7 取組の様子（練習状況、発表の場等 令和3年度 画像）



8 参加児童生徒・保護者・保存会・教員等の感想・意見

【児童生徒】

- ・分かりやすく教えていただきすぐに覚えられた。
- ・みんなと踊れて楽しかった。

【教職員】

- ・初めてこのような踊りを体験し、島民の方たちと一体感を感じた。
- ・発祥のいきさつを歴史的な背景から知った時さらに興味が沸いた。

【地域の方から】

- ・コロナウイルスが収束し、また地域行事が開催できるようになるといい。
- ・これからも島の伝統を大切に守っていききたい。